

「銀河鉄道の夜」のスピリチュアリティ
— 甘えの心理とキリスト教の視点から —

山崎晃史

清泉女学院大学

**Spirituality of ‘The Night of the Milky Way Train’ by Kenji
Miyazawa: From the Perspective of Psychology of ‘Amae’
and Christianity**

YAMAZAKI Koji

Seisen Jogakuin College

1. はじめに

宮沢賢治（以下「賢治」とする）は1896年明治29年に岩手県花巻に生まれ育った。1933年昭和8年にわずか37歳で没している。透明感ある筆致で数々の魅力的な詩・童話を創出した作家として知られている。また、熱心な仏教・法華経信者であり、作品を通じてその信仰を広めようとした面がある。ただし、仏教教化的な色彩は意外に薄く、キリスト教的な素材やモチーフが散見されるほどであり、特定の立場を越えた普遍的な宗教性を感じさせる作品が多い。

本論で取り上げる「銀河鉄道の夜」（宮沢, 1996）も、賢治の世界観の集大成的な意味合いのある未完の作品であるが、友愛や別離などの日常的な状況のなかに（日常性）、自己犠牲、死の意味、ほんとうのさい

わいへの問いなどの倫理的テーマ（倫理性）が展開されている。また、物語の舞台は幻想的で、読む者の五感を刺激する。かつ、静謐さと劇的な展開の両面があり、読む者に深い余韻をもたらし、思考を刺激する。

この幻想的な作品に潜む日常性は、主人公ジョバンニの心理描写に顕れている。私たちが日常的に経験する人間関係の機微がそこに描かれているのである。それは、「甘え」の心理の視点から理解できるものである。本作品のテーマのひとつは人との絆の現実だとも言える。

本作品においてこの日常性と隣り合わせで描かれているのが倫理性である。そして、それは多くのキリスト教的素材によって具象化されている。そのため、本作品におけるキリスト教との関連については、既にさまざまに論じられてきた。それらの多くは、伝記的視点からそのキリスト教的素材を採用した背景や意図を解釈するもの、あるいは個々のキリスト教的素材の象徴的意味を細かく読み解いていくものである。

本論は、こうした伝記的解釈¹や一義的な象徴解釈を越えて、作品そのもの（特に主人公ジョバンニの心理・体験として表現されたもの）のスピリチュアリティをキリスト教的な視点で取り上げるものである。この場合のスピリチュアリティは霊性と言い換えることができるもので、「自分を超越のものとのつながりの感覚や体験」（今橋ら, 2010, p.413）のことである。つまり、その神への志向の姿を、キリスト教的視点を援用して物語の中から抽出する試みである²。

結局のところ、他者との甘えの関係という日常性の背後で働き、生きる力を与えてくれる、神へのあこがれの心情が本作品に読み取れることを確認するだろう。ジョバンニを通じてそれを追体験するわけである。

¹ 作品を作者の意図が表れたものとして理解し、伝記的背景からそれを説き起こしていくのは、いわば古典的な作品批評手法である。現在では、作品を「テキスト」として作者の意図から切り離して批評する視点が生み出されている。

² 本論では作者の意図よりも書かれた作品が照射する世界を重視する。

2. 伝記的背景

2.1 繊細な感性

「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきた」もので「どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書いたままでです」と童話「注文の多い料理店」の序文（宮沢, 1995c）で書いているとおり、賢治の作品は心的現実として感じ取ったものを物語化したものと考えられる。その意味で、決して単なる作り話ではない。感じたままを書き留めていくため、物語の筋に矛盾が生じたり、唐突な展開があったりする。作品は幻想的であり、現実世界ではあり得ない事象が生じる。人や動物や物質や宇宙などを素材に、地球の自然史という壮大な時間をも内包している。いわゆる共感覚³の持ち主だったとも言われている。本作品でも色彩的あるいは物質的質感の表現、擬態音などに満ちていて五感が刺激される。

2.2 自然への親和性と科学的態度

自然の中での生活を大事にした賢治は、郷里の岩手を一種の理想郷に見立て「イーハトーヴ」と命名して、物語の舞台とした。

その自然に対しては科学的な態度で向き合っていた。もともと鉱物に関心が強かったこともあり、鉱物や火山、地質に言及した作品が散見される。それらは、地学や天文学の科学的知見に基づいている。また、農学を修め、教師として自然科学を教え、農民に農業指導を行い、肥料販売の営業もしている。賢治には自然に対して科学的態度で向き合っていく姿勢がある。本作品も銀河の中を旅するという宇宙的規模の自然を舞台としたものであり、素材としてさまざまな鉱物や天体が登場する。

そして、賢治に特徴的なのは、「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」と「農民芸術概論綱要」（宮沢, 1997a, p.9）で述べているように、宇宙を見るまなざしに倫理的な

³ 音に匂いを感じるなど、通常は連動しない感覚の様式間が共鳴すること。

立場を重ねているところである。

2.3 宗教的素養

重要なのは、信仰、宗教心が作品創出のモチベーションの大きな部分を占めていたことである。浄土真宗の信仰が篤い商家に生まれ、少年時代からその影響を受けていた。

賢治にとっては田中智学という仏教運動家からの影響がことのほか大きい。日蓮宗身延派の僧侶であった田中は、そこを離脱して在家運動団体である国柱会を興した。法華経を根本的経典とする日蓮の思想、特に「折伏（しゃくぶく）」すなわち「迷いから覚まさせる」という強い態度での戦闘的布教を重視する団体であった。

賢治はその独自の思想と運動に傾倒し1920年に同会に入会している。もともと、賢治は少年時代に法華経を読み惹かれていた。誰もが仏になれるという普遍的平等観、永遠の相のもとに仏陀の教えを位置づける包括性が法華経の世界観である。加えて、国柱会は、葬式仏教的な檀家制度による仏教寺院の方向性を拒み、現世における活動を重視しており、理想主義的で感受性の強い賢治はそこに強く惹かれたと考えられる。

その国柱会の講師、高知尾智耀という人物と面会し氏から「法華文学」の創作を奨められたとされている（「雨ニモマケズ手帳」）（宮沢, 1997b, p.563）。しかし、その後の賢治の作品には布教的な匂いはむしろ薄い。

賢治の信仰は現世での菩薩道を志すものである。それは実践的態度であり、理想のコミュニティを農民と共に作ろうとする羅須地人協会に結実した。「農民芸術概論綱要」では「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（宮沢, 1997a, p.9）と書いており、個人を超えた包括的な幸福、平等な幸福を実現しようとする志向があった。

「学者アラムハラドの見た着物」という未完の物語の中で、学者アラムハラドが「人が何としてもさうしないであられないことは一体どういふ事だらう」（宮沢, 1995b, pp.332-333）と問いかけ、生徒のセララバアドが「人はほんたうのいゝことが何だかを考へないであられないと思ひます」と答えている（宮沢, 1995b, pp.334）。真の善さを求める求道的感

覚が賢治にはある。

いっぽう、賢治はキリスト教との接点が豊富である。まず、盛岡中学校の英語教師もしていたキリスト教のバプテスト派宣教師、ヘンリー・タッピング⁴（盛岡浸礼教会）に賢治は出会っていた。英語の勉強とキリスト教のことを知るために師のバイブル講義を聴きに行っていたようである（上田, 1988, p.262）。

また、内村鑑三の弟子である、熱心な無教会キリスト者、花巻出身の斎藤宗次郎との交流もあった。どのように影響を受けたかは不明であるが、信仰の姿勢をお互いに尊敬し合っていた、という趣旨の斎藤自身の回顧がある（上田, 1988, p.252）。

カトリック教会盛岡天主公会のアルマン・プジエ神父の名も賢治の作品の中に登場する。同神父は日本の古美術にも詳しく、地域で親しまれた存在だった。同じ地域に暮らす者として自然と知るところになったのだろう。賢治が同教会に行ったことがあるという証言もある（上田, 1988, p.263）。

いずれにしろ、作品に登場するキリスト教的モチーフの質からすると、キリスト教に単に触れる機会があったということ以上に、賢治自ら学び吸収していたことが推測されている（テモテ・カーン, 2010）。

本作品では十字架、バイブル、カトリック風の尼さん、たったひとりの神様、賛美歌、ひざまずいて、神々しい白いきもの人、などの語句が登場する。十字架はイエスの死と復活を象徴するものであり、白いきもの人はイエスを示している可能性がある。登場人物もジョバンニはヨハネ（洗礼者ヨハネや福音記者ヨハネ）のことであり、カムパネラも汎神論的傾向のあったルネサンス期の神学者トマゾ・カンパネッラ（Tommaso Campanella, 1568-1639）から取ったという説がある（原, 2013, p.152）。また、ケンタウル祭は、夏至の祭りを引き継いだとされる洗礼者聖ヨハネの祝日（6月24日）を銀河の祭りに転用したもののように

⁴ 名は「岩手公園」という詩に登場する。作品「ビヂテリアン大祭」に登場する祭司次長「ウィリアム・タッピング」の名は彼から取った可能性がある。

ある（原, 2013, p.243）。このようにキリスト教的素材が豊富である。

しかし、本作品中では、キリスト教徒らしき女の子の言う神さまをジョバンニが「うその神さま」と言い、カムパネルラがキリスト教徒らしき人々の下車したサウザンクロスでは降りず、ほんとうの天上の近くでいなくなっている。これらの内容や伝記的研究から、賢治は当時のキリスト教（既存宗教）の墮落を批判しているのだとの説がある（石井, 2016）（上田, 1988）。佐藤（2000）は、十字架などの背景に「つめたさうな天」を描写し、「蠍の火」はこれを黒々と焦がし燃えていて、「キリスト教を含めた既成の宗教への異和の、また批判の熾しい表現」（p. 25）を見ており「ひらかれた宗教性への熱い希求」（p. 26）があるとする。個人的観点からはそのような解釈も成り立つが、物語の進行を素直に追うと、必ずしもそうした対立がテーマだとは言えない（後述）。

いっぽう、上田（1988, p.292, p.311）は、本作品には「法華経信仰を中心に諸宗教を融合したシンクレティズムで神秘主義的シャーマニズム的傾向」があると指摘する。斎藤（1994）は、「信じる神を異にしてもキリスト教徒も異教徒も求めるところは同じ「みんなのほんとうの幸福（菩薩行）」であることを明らかにしようとしている」（p.59）とし、「仏教とキリスト教の融和を求めている」（p.60）とする。テモテ・カーン（2010, p.132）は、「東洋と西洋の二つの世界観に対して好意的な態度をもって独自の視点を展開した意義深い「実績」」だとした。山根（2023）は、遠藤周作の「深い河」との共通点を指摘しながら、両作家が「諸々の宗教を平和的に共存せしめる開かれた根源的宗教性をテーマにした物語世界」（p.270）を書いたのだとした。

また、鈴木（2002）は、登場人物の女の子は賢治が出会っていた宣教師ギフォードをモデルとしているとし、賢治であるジョバンニとの議論で、決定的な宗教対立を避けるように平行線で終わっていると解釈している（pp. 97-107）。

梶山・富永（2015）は「「存在論的悲哀」という人間の普遍的テーマを、聖書の思想を手がかりに探求しようとした文学」（p.308）だとし、登場する素材や数字を聖書の象徴と関連させて、いかに聖書的な内容である

かを論じている。賢治のキリスト教関係者との交友関係からイザヤ書、ヨブ記、ヨハネの黙示録などの影響を受けているとする。例えば、イザヤ書 53 章のいわゆる「苦難の僕」の影響を受けているとする。そして、「シンクレティズム（宗教混交）の痕跡が認められません」（p.308）とまで言い切っている。だが、賢治が聖書のテーマをキリスト教弁証的に配置したとまで言える根拠は乏しい。ただし、以上見たように、作品の内容に聖書およびキリスト教の素材やテーマが暗に含まれているのは確実だ。

2.4 情愛の個人史

家族愛、友愛を含む愛憎の個人史も作品に影響を与えている。浄土真宗を信仰する裕福な家に生まれた賢治は、生活が苦しい農民を相手に質屋、古着商を営む家業と父親に対し、その信仰を含めて反発した。これが、法華経信仰へと強く傾倒させた一つの心理的要因だったと考えられる。しかし、活動に際して父親から金銭的な援助を受けたり、家族を国柱会に入会させようと説得したり、晩年は父から認められて喜んだり、と父親を否定、拒否したのではなかった。土居健郎（1920-2009）の言う「甘え」の心理の裏返しとしての愛憎の姿だったと考えられる⁵。

⁵ 土居健郎は精神科医、精神分析家。「甘え」は、それを直接翻訳できる外国語がないことから、日本人の心理を分析するのに適した概念として土居が採用した（土居, 1971）。しかし、文化の違いにかかわらず人間心理全般を理解するキーワードになり得ることも強調されている。「甘え」の心理は、本作品の解釈にも採用する概念でもあるので、ここで取り上げておく。「甘え」は、相手の愛情を当てにする感情であり、一体感を求める心理である。他者との関係の中で、相手に直接的に愛を示すというよりも、愛されることを期待する心理である。一見、受け身な姿、相手次第であることが特徴である。それこそ素直に「甘える」こともあるが、ほのめかしたり、思わせぶりにしたりという態度もあり得る。満たされると満足する。満たされないと、すねたり、ひがんだり、羨んだり、怒りを生じたりとアンビバレント（両価的）なさまざまな感情や態度が生じる。悔やんだり、すまない気持ちが生じたりすることもある。他者に対する「甘え」は状況により、その都度さまざまな愛憎の表現で示される

いっぽう、妹のトシ（1898-1922）は兄賢治に対し親和的で信仰の同志でもあり親密だった（原，2013，p.700-701）。そのトシが病に倒れわずか24歳で亡くなった。その際に書かれた作品「無声慟哭」（「春と修羅」所収）は妹に対する痛切な悲しみで満ちている（宮沢，1995a，pp.137-153）。絆を断ち切られた賢治は、生涯、妹を想い続け、それが諸作品に影響を与えている。

そこで、本作品ではカムパネルラにトシを重ねていると解釈されることがある（福島，1985）（長田，2023）。実際、トシの死後、その面影を求めて樺太まで汽車と船で旅をしており、その際の、鉄道の旅のモチーフが本作品に反映されたとされる。車窓風景に思慕の情を重ねて描いた「オホーツク挽歌」（「春と修羅」所収）（宮沢，1995a，pp.155-186）は本作品の先駆形とされている。北川（2014）は本作品の第四次稿執筆時には、カムパネルラの死が描かれているため、それはトシの死が時間経過を経て悲しみと共にしっかり受け止められているということであり、その心理状態はボウルビィ（Bowly, J. M., 1907-90）のいう悲哀の四段階⁶の再建の段階に当たると述べている。福島（1985）は、トシへのその近親相愛的な願望の投影のゆえに、それを否定するために突然夢から覚める物語の展開となっているとする。

友人関係では、保坂嘉内（1896-1937）（以下「嘉内」と略す）の存在が大きな意味を持っている。盛岡高等農林学校の学生寮で同部屋となった嘉内とは、友愛の絆を強く感じ合い、同人誌を発行する仲間となった。嘉内は言動を学校から危険視され退学処分となったが、その後も多くの手紙のやりとりをしている。賢治は国柱会の活動に嘉内を熱心に繰り返し誘うが、悉く断られる。そのうちに関係がこじれ、二人は決別することになってしまう。その強烈とも言える愛憎の経過と顛末は、青年、賢治に深い傷を残した。この経験も作品に影を落としているとされてきた。「銀河鉄道の夜」でも、ジョバンニとカムパネルラを巡る友愛と葛藤が

ことになる。

⁶ ボウルビィ（1981，p.117）は人が重要な他者と死別した際の反応を①麻痺期、②失った人を思慕し探し求める期、③解体と絶望期、④再編成期に分けた。

描かれており、カムパネルラは嘉内をイメージしているという解釈がある（原, 2013, pp.662-663）。

このように、賢治が現実の人間関係のなかで味わった悲哀と甘えの葛藤がジョバンニの心理にも投影されていると考えられる。本作品は1924年頃から執筆が始まり、第一次稿、第二次稿、第三次稿へと推敲が重ねられ、そして、1931年頃に現在広く読まれている第四次稿へと改変され、物語が変化した。本論は第四次稿（宮沢, 1996）を解釈の対象とするが、それゆえ晩年の精神世界が顕れていると考えられる。

3. 解釈：ジョバンニにおける甘えの葛藤および神へのあこがれ

3.1 物語の構造

既に述べたように、本論では伝記的視点は最小限にとどめ、ジョバンニの心の動きを丁寧に追う。まず、指摘しておきたいのは、幻想の旅という非日常を含めて、ジョバンニの心理状態には一貫して「甘え」の葛藤が読み取れることである。

また、この物語は少年の日常という現実世界から始まり、天気輪の柱のある丘の場が転換点となり幻想的な銀河鉄道の旅に出て、現実世界に戻るという、現実→異世界→現実という構造になっている。この旅は「キリスト教徒にとっては北十字（白鳥座）から天国に通じる南十字への巡礼の旅にもなって」（斎藤, 1994, p.54）いるとの指摘があるとおおり、その舞台はキリスト教的である。

旅は現実世界に戻るときに夢であったことが明かされるが、しかし単なる夢ではない。現実世界に戻った後も、カムパネルラと共にいたこと、カムパネルラが銀河の外れにいるとしか思えないことなどが強いリアリティをもってジョバンニの口から語られている。何よりも、夢の中でのカムパネルラのその旅が死への旅であることが暗示されており、現実世界でもちょうどそのときカムパネルラが溺れていたというのは、因果関係では説明できない共時性⁷のある出来事である。銀河鉄道の旅は

⁷ 共時性（synchronicity）はC.G.ユング（1875-1961）が取り上げた深層心理学

現実と非現実を超えた一種の神秘体験が元になっているとする解釈もある（上田, 1988）。

このような、旅という展開については、自立へと向かう少年の成長物語として解釈されることも多い。

現代的に言えばジョバンニはザネリから「いじめ」を受けている。しかし、そのグループの中にいるカムパネルラとは幼なじみでかつては楽しく遊んでいた仲である。カムパネルラはあからさまにいじめることはしないが、同情的なところを匂わせるくらいで、その態度は曖昧である。ジョバンニは孤独を感じ満たされない。

加えて家族を巡る不遇さも描かれている。そもそも「いじめ」も父親のことがネタにされている。そして、母親は病で伏している。ジョバンニは少年であるにもかかわらずアルバイトをして家計を助け、母親をケアしている。現代的な概念では「ヤングケアラー」である。仕事で眠く、勉強に集中できない様子が描かれている。

こうした状況の中で旅が始まり、カムパネルラとの新たな関わりが進み、さまざまな出会いと出来事があり、葛藤を味わい、神を意識し、別れを体験し、現実世界に到着する。そこには現実の別れ、悲哀を背負うカムパネルラの父親の姿があり、自分の家への帰還が描かれる。

家族の不遇や理不尽なからかいからの負荷、甘えの葛藤、別離の悲哀、愛他的行為への目覚め、ほんとうのさいわいの探究、神への志向がテーマになっている。

こうした展開から本作品は、少年の成長物語あるいは心の変容のプロセスとして解釈されることが多いのである。ジョバンニが、孤独を悲しみ、現実の状況から生じるコンプレックスに悔しい思いをしながら、それを乗り越え、自立していく姿を読み取るのである。実際、ジョバンニのカムパネルラに対する態度としては、旅の終盤では「しっかりしよう」などとリードする呼びかけが多い。

的概念である。同時的に生じた、意味ある偶然のできごと、深層で関連のあるできごとである。合理的な因果関係はないが、人生や心理療法において転機となり得る、できごとの相互連関のことである。

村瀬 (1989) によれば、本作品には少年が何事かを知ってゆくという「知る」ことへの過程への基本的問いかけがあるという。ジョバンニに象徴される「少年」の「主観性」が旅を可能にしている、ここでは「信じる」ことと「知る」ことの分化、「物語」と「科学」の相克、立場による解釈の違いなど少年が成長する中で出会うテーマが扱われているという。カムパネルラは少年の少し先を行く「青年期に出立する者」の謂いであり、カムパネルラが旅の最後に消えたのは死んだというよりも青年期に移った（旅立った）ということなのだという。

3.2 あらすじに沿っての解釈

本節では「銀河鉄道の夜」（宮沢, 1996）を物語の展開に沿って要約しながらジョバンニの心理を中心に解釈する。【】内は部分毎に独自に設定したキーワードである。「」内は引用で旧仮名遣いの原文を用いる。

3.2.1 現実世界における悲哀—さびしさ

【授業】少年ジョバンニの視点で物語が進行する。授業シーンから始まる（一、午後の授業）。天の川が何からできているか問われたジョバンニは、暗に知りつつも、毎日の仕事で眠く、答えられない。級友のザネリはそれを見て笑う。カムパネルラも答えられない。ジョバンニは、気の毒がってわざと返事をしないのだと解し、自分たちをあわれに思う。

【仕事】授業を終え、カムパネルラらが星祭の準備で集まっているのを見かけつつ、ジョバンニは活版所に急ぐ（二、活版所）。仕事をしてお金を得てパンと角砂糖を買う。

【母親】ジョバンニは帰宅し母親と会話する（三、家）。母親は病気で伏している。不在の漁師の父親が帰って来る気がすると話すが、母親は漁に出ていないかもしれないと応じる。ジョバンニは「監獄へ入るやうな悪いことをしたはずはない」と言い、複雑な背景が暗示される。また、父親がラッコの上着を持ち帰ると言ったことが、「みんな」に知られており冷やかされることを告白する。カムパネルラはそういう時には加担しないこと、父親どうしが幼なじみのため、ジョバンニとカムパネルラ

は小さな頃から遊んでいたことが示される。カムパネルラの家で、アルコールランプで走る汽車で遊んだことを回想し、あのころはよかった、と思う。そして、未配達牛乳を牛乳屋に取りに行きながら祭を見に行くつもりで外出する。

【孤独】機関車をイメージしながら町を急ぐジョバンニは偶然、ザネリと出会う（四、ケンタウル祭の夜）。いきなり「お父さんから、らっこの上着が来るよ」とからかわれ、やり場のない感情を抱く。店先に飾られた星座の図に見入り、星座のなかを歩く憧れを抱く。牛乳屋に着くと、老女が出てきて後で来てほしいと言われる。店を出たジョバンニは再びザネリや級友に出会いからかわれる。そのなかにカムパネルラがおり、気の毒そうにしていたのを見る。その視線を避け、さびしくなり、黒い丘へ向かう。

【横臥】「天気輪の柱の下」で横になる（五、天気輪の柱）。

【解釈】

ここまでは、家庭の状況や仕事の忙しさ、人間関係の葛藤を背景にしたジョバンニの陰鬱とした感情が描かれている。カムパネルラだけは悪く思いたくないという思い、カムパネルラとはお互いに気遣い合っているという思いを支えに、友愛を信じようとしている。しかし、気持ちは晴れることはなく逃避するかのように丘へ向かった。「甘え」の心理の視点から理解すれば、親にも友人にも甘えられず、満たされず、さびしさに逃避先を探すしかない状態と言える。これは現実世界で少年のみならず多くの人が味わう悲哀である。その意味で、ジョバンニは成長途上の児童の象徴であると共に、全ての傷ついた人間の象徴でもある。そこに私たちは自分の痛みを重ねる。

3.2.2 銀河鉄道の旅の始まりーかなしみに似た新しい気持ち

【乗車】突然、「銀河ステーション」というアナウンスが聞こえ、ぱっと明るくなる。ジョバンニは列車に乗っていて、カムパネルラが同乗していた。カムパネルラは「ザネリはもう帰ったよ」と言う。車窓からの景色は燐光の三角標が野原のあちこちにたくさんあり美しく、ジョバ

ンニは銀河の中を進んでいることを自覚する(六、銀河ステーション)。

【ほんとうのさいわい】突然、カムパネルラが「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか」と言う(七、北十字とプリオンシム海岸)。母親が「ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする」が、何が「いちばんの幸」か分からないと泣き出しそう。そして、「ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸」なのだから許してくれるはずと言う。

【北十字】その直後に、ぱっと白く明るくなり、白い十字架がしずかに永久に立っているのを見る。皆が口々に「ハルレヤ、ハルレヤ」と声をあげ、バイブルを胸に当てたり、数珠をかけたり、指を組み合わせて、そちらに祈る。十字架は後方へと見えなくなっていくが、「カトリック風の尼さん」がいてそちらに祈っていることに気づく。ジョバンニら二人も「胸いっぱいのかなしみに似た新しい気持ち」(原文ママ)を話し合った。

[解釈]

これは逃避というネガティブな動機で始まった旅とも言えるが、距離を感じていたカムパネルラと二人で進む明るく広大な宇宙の中の旅となり、心が躍るものであった。しかし、カムパネルラはほんとうのさいわいを巡って謎の悲しみを抱えている。ここで、ジョバンニに自分を重ねた私たちは、カムパネルラを大切な他者の象徴と解する。私たちは、他者の悲しみに向き合い、自分だけの幸福を超えたほんとうのさいわいとは何かという根源的テーマへと導かれる。

突如、聖なるものが示される。聖なるものの圧倒的な力に、人々はただただ祈る。十字架はイエス・キリストの姿を示す一種のイコンである。歴史の中で成し遂げられた十字架上の死と復活を示すものであり、神の栄光とその無限の愛を示す。それは、死の悲しみと死からの復活の大きな喜びの同時的な体験をもたらし、「かなしみ」でもあり「新たな気持ち」でもあるという不思議なものでもある。ジョバンニと共に私たちはそれを体験する。

3.2.3 プリオシン海岸、鳥捕り—邪魔のような気

【プリオシン海岸】白鳥の停車場に20分停車する。二人も降りて銀河の河原に出る。水晶でできた砂やすきとおった礫（こいし）があり、手にぶつかった波は燐光を生じた。化石を発掘する学者にも出会う。

【鳥捕りの登場】再び発車した列車には「鳥捕り」が乗ってきて二人と会話する（八、鳥を捕る人）。天の川の砂で鷺ができていて、つかまえると「安心して」死ぬので、「押し葉」にして食べるのだという。不審がる二人に、鳥捕りは鷺や雁のそれを見せ試食を勧める。ジョバンニは単なるお菓子だと思いながら食べ、馬鹿にしながら食べるのは「気の毒」だと思うが、カムパネルラはただのお菓子でしょう、とストレートに聞いてしまう。鳥捕りは慌てた様子でいなくなるものの、車外で鳥を捕る姿が見える。そして、いつの間にか車内に戻っていた。二人はどこから来たのかと問われるが答えられない。

【検札】「九、ジョバンニの切符」からは最後まで章立てはない。「白鳥区」を過ぎ、車掌の検札があり、カムパネルラは切符をすぐに出すものの、ジョバンニは心当たりが無く焦る。畳んだ紙切れがありそれを渡すと通用した。鳥捕りは「ほんたうの天上へさへ行ける切符」で「どこでも勝手にあるける通行券」だと驚く。

【鳥捕りへの情】ジョバンニはにわかに「鳥捕りが気の毒でたまらなくなり」「この人のほんたうの幸になるなら...（中略）...百年つゞけて立って鳥をとってやってもいゝ」と思い、ほんとうにほしいものを尋ねようかと迷っているうちに鳥捕りはいなくなる。「あの人が邪魔なやうな気」がして大変つらく、こういう気持ちははじめてだと思う。

【解釈】

神が宇宙を創造し、それらを極めて良いとしたように（創世記1:31）、聖書は物質的なものの価値を低く見るものではない。ましてや、精神＝善、物質＝悪という二元論ではない。全ては良いものである。宇宙の美しさに感嘆し、科学的に探求することは神を見ることにつながる。この旅では宇宙や鉱物という通路によっても聖なるものを感じ取る。

「鳥捕り」はトリックスターであると解釈できる。道化のような役割

で、非日常を日常の空間、時間に導入し、対立的なものの解決を図る。鳥捕りの登場は、物語にアクセントを与え、生と死の対立軸の融解を図り次の死にゆく人の登場を促している。また、ジョバンニの切符の意味を説き明かす重要な役割も担っている。道化的存在は哀れで邪魔なように感じられる。私たちもトリックスターと転機に出会うことがある。

単なるお菓子と感じられる死んだ押し葉の鳥、という構造は、ミサ、聖餐式で食されるキリストのからだとされるパンと類似している。その場合、さしあたり司祭がトリックスターということになるのか。

邪魔なような気がして大変つらいという心理は、私たちに潜在する差別心や他者への優越心、あるいは「甘え」によるわがまを自覚したときの居心地の悪さに通じる。しかし、自覚することは制御する第一歩であり、ここにジョバンニの成長がある。そして、それは私たちの倫理的目覚めへの促しでもある。

3.2.4 青年と姉弟 ——さそりのはなし、ほんとうの神さま

【青年と姉弟の登場】りんごや野茨の匂いがしてくると、6歳くらいの男の子がふるえて立っていて、隣に青年がいた。その後ろには12歳くらいの女の子もいた。青年は「わたしたちは天に行くのです」と言い、こわいことはなく「神さまに召されてゐる」と女の子に言う。青年は家庭教師で、二人を連れて本国に帰る途中、乗った船が氷山にぶつかり沈没したという。青年は、全員は乗れないボートに他の人を押しつけて二人を乗せようとするが、他の子どもたちがいるなどして勇気が出ない。その葛藤が続いているうちに沈んでしまい覚悟して二人を抱く。皆で賛美歌を歌うところで渦に巻き込まれ、気づくとここにいた、と言う。

【嫉妬】 苹果（りんご）を食べるシーンとなり、賛美歌の合唱が聞こえてくる。ジョバンニとカムパネルラも思わず一緒に歌う。ここでカムパネルラと女の子が会話をする。ジョバンニは悲しくなり、カムパネルラにここで降りようと言いたくなる。

赤旗、青旗を持った男の合図で鳥の群れが止まったり通ったりするのを見る。女の子は鳥が渡る姿を見てきれいだと言ったとジョバンニに話しかけ

る。しかし、答えなかった。ジョバンニは悲しくなり、心持ちをきれいにしなければいけないと自ら言い聞かせる。カムパネルラがジョバンニに話しかけるがぎこちない応答になる。新世界交響曲が流れてくるが、カムパネルラは女の子とばかり話していてつらいと心の中で吐露する。

【心境変化】インディアンのいる高原を通り下りに入ると川が眼下に見え、するとジョバンニの心持ちは明るくなっていく。天の川をはねる鮭や鱒の姿を見て気持ちが軽くなる。機嫌が直り女の子とも笑って会話するまでになる。「蝸（さそり）の火」が見えてくる。

【さそりのはなし】女の子はお父さんから聞いたさそりの話をする。ふだん虫を殺して食べていたさそりがいたちに食べられそうになって逃げて井戸に落ちた。溺れてしまい、自分をいたちに与えなかったことを悔やむ。神さまに、次は「まことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい」と祈ったという。すると自らがまっ赤なうつくしい火になったのを見たという。ジョバンニは、うつくしいさそりの火が明るく燃えているのを見た。

【ほんとうの神さま】姉弟たちが降りるべきサウザンクロスに近づく。男の子はしぶりジョバンニは一緒に行こうと言う。女の子は天上に行く駅であり降りなくてはと言う。「天上よりもっといゝところ」と反論するジョバンニ。神さまの招きだと女の子が言うと、「そんな神さまうその神さま」と応じる。青年は「あなたの神さまってどんな神さまですか」と聞く。「ほんたうのたった一人の神さま」と答える。青年は「ほんたうの神さまはもちろんたった一人です」と言い、ジョバンニは「たったひとりのほんたうのほんたうの神さま」だと違いを主張する。青年は、そのほんとうの神さまの前で会うことを祈ると言う。

【サウザンクロスの別れ】別れのつらさを感じ合う。そのとき、十字架が輝き後光がかかり、皆がお祈りを始める。「ハルレヤ、ハルレヤ」という明るく楽しい声が響く。女の子は「ちゃさよなら」と言い、ジョバンニも泣き出したいのをこらえて怒ったようにぶっきらぼうに「さよなら」と答える。降りた人々は十字架の前の天の川のなぎさにひざまずいて、神々しい白いきもの人が手をのばしてやってきた。列車は動

き出しすぐに見えなくなる。

[解釈]

青年、男の子、女の子は自己犠牲的な死を迎えつつある存在だが、天国への神の招きを理解しつつ、これで良かったのかという葛藤をどこかに抱えている。さそりの話は賢治の作品「よだかの星」にも描かれているテーマとも共通しているが、カムパネルラや青年たちの姿も含め、これらはどれも自己犠牲を計画的に疑いなく行っている姿ではない。迷ったり自らの罪を自覚して後悔したりしながらのものであり、悲しく切ない姿である。

さそりの話には、自己犠牲的死に限らず、原罪とその浄化の課題が暗示されている（関口，2011）。火で灼かれるとはそのことの象徴である。さそりの輝きを見ながら、罪の痛みへの共感と共苦を寄せ、死者を含め他者のために、私たち自身のことも含め、覚えて祈るのである。

愛他的行為は聖書も教えるところだが、いくら正しい行為のゆえだとしても、ひとりの具体的死を前にジョバンニに代表される私たちは切ない思いにかられる。死なないでほしい、まだ一緒にいてほしい、と叫びたくなるのである。ほんとうの神さまをめぐる言い合いはそういうシーンである。それゆえ、この【ほんとうの神さま】の箇所およびその前後は、どちらがほんとうの神かというような議論を「本当に」しているのではない。

それは、現実の別れの場面を想像すると容易に理解できるはずだ。どう懇願しても別れの時は来る。描かれているのは、あらゆる別離に向き合う私たちの姿でもある。別離の恐れに突き動かされて、引き延ばすために言いがかりのような駄々をこねるのである。そもそも、女の子たちが降りて向かう場がほんとうの場ではないとしたら、サウザンクロスのごうごうしさは描かれていないだろう。また、最終的には別れの淋しさを分かち合っており決裂しているわけではない。こうしたことからジョバンニの言った「ほんたうの神さま」と女の子が言った神さまは同じ神さまだと考えても不自然ではない。ほんとうの神さまへのあこがれと期待は共通しているのである。

この箇所について、千葉（2005）は「中途半端なところで神や天上の存在を認めることを許さず、ひいては、超越的存在そのものまで否定し去る力をもった」（p.70）としている。清水（1992）はジョバンニが「超越神としての〈神〉を拒んで、自らが絶対正義としての〈神〉となる途を歩もうとしているかのよう」だと読んでいる（p.183）。関口（2011）は河合隼雄などの解釈を引きながら、「法華経もキリスト教も超えた絶対者の存在に、賢治は想いを馳せている」（p.16）と言う。

このように【ほんとうの神さま】の箇所は、伝記的視点を援用して神の否定や伝統的宗教の否定、あるいはキリスト教の神を超えた神の存在、地上に理想社会をつくることの優位性を打ち出しているものとの解釈が散見される。だが、作品そのものが表現しているのは、既に見たようにそうした対立ではない。また、キリスト教の視点からすれば、神は人間の理性では把握し切れず、常に理解を超える存在である。この箇所は、死への旅立ちに際した双方の悲哀あるいは甘えの葛藤が表現されており、それと同時に神へのあこがれが表明されている場面であり、神学的議論の場面として読む必要はない。

カムパネルラと女の子の關係に嫉妬するジョバンニの姿は、死にゆく人が描かれている場面とはギャップのある極めて日常的な人間關係の葛藤である。しかし、これが人間の現実であり、私たちもその心の動きが痛いほど理解できる。カムパネルラを独占したいという「甘え」が満たされないと、すねる、ひがむ、うらやむということになる。旅を共にして女の子たちとの情愛的絆もできつつあるなかで、「甘え」が素直に表現できず、ぶっきらぼうに別れる。そうした人間心理の機微がそのまま描き込まれている。こうした他者との日常の甘えの葛藤という横のつながりを、神がもたらすほんとうのさいわいへのあこがれという垂直の關係が支えている。

3.2.5 カムパネルラとの別れ ―悲哀と再出発

【呼びかけ】ジョバンニは「どこまでもどこまでも一緒に行かう」とカムパネルラに呼びかけ「ほんたうにみんなの幸のためならば僕のから

だなんか百ペン灼いてもかまはない」と表明する。カムパネルラもそうだと応える。「けれどもほんたうのさいわひは一体何だらう」とジョバンニは言うが、カムパネルラは「僕わからない」と応じる。ジョバンニは、一緒にどこまでもほんたうの幸を探しに行こうと重ねて訴える。

【カムパネルラとの別れ】カムパネルラはきれいな野原を「ほんたうの天上」だと言い、ぼくのお母さんと指さして叫ぶ。ジョバンニはそちらを見るが見えない。ジョバンニは再び「僕たち一緒に行かうねえ」と言って振り返るがカムパネルラは既になくなっていて、ジョバンニは窓の外に乗り出して激しく叫び、泣き、まっくらになったように思う。

【解釈】

ジョバンニはカムパネルラと女の子の關係に嫉妬しながらも、淋しさを自覚したり感情をあらわにぶついたりしながら乗り越えていく。そして、さそりの話に触発されつつ、愛他的姿勢へと拓かれ「甘え」の葛藤を乗り越え、カムパネルラと同志として共に歩いていこうとしている。呼びかける姿に変容しているのである。ジョバンニは自律的な人間に成長しつつあると言えるが、この過程は「ほんたうのさいわひ」への希求で支えられている。キリスト教的に言えばたったひとりの神さますなわち唯一の神を求め、そこに帰還することにそのさいわいがある。人は根源的に常に神へのあこがれを抱かずにはおれない。

3.2.6 目覚め ―日常への帰還

【目覚め】ジョバンニは眠っていたことに気づく。涙を自覚する。

【カムパネルラの行方不明】町に戻り、牛乳屋に牛乳をもらう。川の大きな橋のところで人が集まっているのを見て何かあったのか聞くと「こどもが水へ落ちた」とのこと。カムパネルラと一緒にいた友だちのマルツが走り寄ってくる。川に落ちたザネリを助けようとカムパネルラが飛び込んで見つからないと聞く。

【カムパネルラの父】カムパネルラの父と出会う。ジョバンニはふるえる。ジョバンニにはカムパネルラがもう銀河の外れにしかないような気がする。皆はどこからか出てきそうだと期待している風である。し

かし、カムパネルラの父はきっぱりと「もう駄目です」と言う。ジョバンニはカムパネルラの行った方を知っていると伝えたいが言えない。むしろカムパネルラの父はジョバンニに礼を言い、ジョバンニの父から元気な便りがあり、もう着くころだと教えてくれた。

【家路】母親に牛乳を届け父の帰りを知らせようと街の方へと走る。
[解釈]

カムパネルラとの別れは胸に迫るものがあった。私たちも、親密な他者とも死やその他の理由によって永遠に別れなければならない。しかし、じゅうぶんに悲しむことが絆を確認することになる。ジョバンニのように「銀河のどこかにいる」ことを実感することになる。悲しみには意味があるのである。

幻想の旅は終わり現実生活に帰還した。聖なる世界とのつながりを確認することが、現実を生きる力を生み出す。

しかし、現実は理不尽なものである。自分をいじめるザネリは生き残り、カムパネルラは犠牲となった（ことが暗示されている）。これは、私たちを取り巻く不条理を象徴している。こうした運命に神は不在であると言いたくなる。しかし、銀河の旅を経たジョバンニ（と私たち）はそうした呪いの言葉を吐くのではなく、あらゆる状況には目に見えないほんとうの意味が隠されているのだと感じ、受け止めている。

カムパネルラの父の冷静な姿には科学的態度の象徴を見る解釈もあり、沈黙する神、応答しない神をそこに重ねて見る解釈もある。あるいは悲しみに耐えて進む者、菩薩の姿を見る解釈もある。

人間心理を元にすると、ここで描かれているのは、犠牲的な死であれば意味があるはずと必死に納得しようと気丈にふるまう父親の姿である。その姿は平然としているようで痛々しい。ジョバンニは何も言うことができない。

カムパネルラの父は、ジョバンニを見て、その父親の帰宅が近いという情報を贈る。危機的な状況の中でも人は意味あることを行えることを示している。斎藤（1994, p.121）もこの父は「「ほんとうの幸福」の宗教的理念を静かに行う人」として描かれているとしている。

ジョバンニは我に返り家路を急ぐことになる。家族との絆の確認である。授業という社会的場面から始まった物語は、家という情緒的絆の場へ帰還することによって終わる。牛乳は日常性の象徴である。そして、物語は続くのである。ここに至りジョバンニは孤独ではない。

4. まとめ：「銀河鉄道の夜」のスピリチュアリティ

ジョバンニは少年であり、成長途上の存在である。しかし、それは、年齢、性別を問わず備わる児童性、思春期性の象徴である。人間関係で傷つきやすく、しかし、素直に理想を求める私たち自身の一面の象徴でもある。

ジョバンニの体験世界は徹底的に「甘え」の葛藤、悲哀の葛藤を抱える日常である。そのなかで、銀河鉄道の旅が進み、ほんとうのさいわいやほんとうの神をあこがれ希求する心情に気づき、同行者と共に進んでいこうとする。その際、どうしてもわかり合えない悲しみに直面し葛藤する。また別離も避けられなかった。しかし、それでも大切な人は銀河のどこかにいると確信する。しっかりと大切な人の存在が位置づくことで孤独ではなくなる。

本作品中に散らばる自己犠牲のテーマは、意図的無意図的に他者を傷つけてしまう、貶めようとしてしまうことを含めた原罪の自覚と、そうした罪深さをもつ人々との共苦を伴う連帯の志向を表している。さそりの火を見るまなざしは、キリスト教的視点からはイエスの十字架上の死と復活を仰ぎ見る私たちのまなざしでもある。

自己犠牲的死は愛他性の究極的象徴であるが、それは単純に称揚できないジレンマも生み出すものであり、その現実も直視せざるを得ない。しかし、それを含めてほんとうのさいわいという永遠の相のもとで、何らかの意味があることを信じるのである。

また、本作品では宇宙とその物質が大きなスケールで感覚的美しさを伴いながらジョバンニたちを包む。キリスト教的な視点で言えば、それは聖霊の働きを暗示している。

こうしてジョバンニを通して私たちも旅をする。銀河の旅はほんと

うのさいわい、ほんとうの神、聖なるものとのつながりを探し求める巡礼のことであり、それは大切な人と辿るものであり、日常心理とも重なり合っている。「銀河鉄道の夜」は現実生活のただなかでも、聖なるものへの通路があることを暗示している。決して神秘体験という特殊な状況を描いているのではない。

以上述べてきたことから本作品のスピリチュアリティ、ジョバンニの体験世界が示すスピリチュアリティとは次のように言える。それは、神（聖なるもの）へのあこがれの感覚は、日常のただ中で他者への「甘え」やその葛藤を味わうことと隣接して顕れてくるというそのようなあり方である。言い換えれば、人間関係の甘えの関係によってゆさぶられながら、神へのあこがれ、神との愛の関係に向けて拓かれていくという人間存在のあり方である。

土居（1992）は、人に甘える心があってはじめて信仰も成り立つことを述べている（p.213, p.215, p.217）。「甘え」は相手から愛されることを期待し、満たされることで安心する心理である。神との関係でも愛されていることを信じ実感することで満たされる。ただし土居は、神の応答は人間的甘えとは全く次元が異なる想定を越えたものであることを示唆し（pp.161-165）、信仰と「甘え」は同じではないと述べている。

神の愛は触知しうるものではなく、予測を超えたものであり、思いがけない形で示される。そこで、ちょうど本作品のように、ほんとうのさいわいを信じるあこがれのような態度で、神の愛を待望することになる。

イエス・キリストは今も私たちひとり一人と共にいると信じるキリスト教的な視点で読むならば、ほんとうのさいわいが何かは、神＝イエスも私を探し求めていた、ということを手ではなく心で実感することでほんとうに分かるということになる。「甘え」は心で実感する性質のものだからである。

引用文献

- ボウルビー・作田勉監訳（1981）『ボウルビー母子関係入門』星和書店
- 千葉一幹（2005）『「銀河鉄道の夜」しあわせさがし』みすず書房
- 土居健郎（1971）『「甘え」の構造』弘文堂
- 土居健郎（1992）『信仰と「甘え」 増補版』春秋社
- 福島章（1985）『宮沢賢治—こころの軌跡—』講談社
- 原史朗（2013）『定本 宮澤賢治語彙辞典』筑摩書房
- 今橋朗・奥田和弘監修（2010）『キリスト教教育事典』日本キリスト教団出版局
- 石井竹夫（2016）「宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」に登場するリンゴと十字架（前編）」、人間・植物関係学会雑誌, 16(1), pp.45-48
- 北川明（2014）「心理療法の意義—宮沢賢治「銀河鉄道の夜」より—」, 臨床心理学部研究報告（京都文教大学）, 6, pp.139-154
- 桐山義次・富永國比古（2015）『「銀河鉄道の夜」と聖書—ほんたうのさいはひ、十字架への旅—』キリスト新聞社
- 宮沢賢治（1995a）「心象スケッチ 春と修羅」, 新校本宮澤賢治全集第2巻詩I 本文篇, pp.5-227, 筑摩書房
- 宮沢賢治（1995b）「学者アラムハラドの見た着物」, 新校本宮澤賢治全集第9巻童話II 本文篇, pp.330-337, 筑摩書房
- 宮沢賢治（1995c）「注文の多い料理店 序」, 新校本宮澤賢治全集第12巻童話V・劇・その他 本文篇, p. 7, 筑摩書房
- 宮沢賢治（1996）「銀河鉄道の夜」, 新校本宮澤賢治全集第11巻童話IV 本文篇, pp.123-171, 筑摩書房
- 宮沢賢治（1997a）「農民芸術概論綱要」, 新校本宮澤賢治全集第13巻（上）覚書・手帳 本文篇, pp.9-16, 筑摩書房
- 宮沢賢治（1997b）「雨ニモマケズ手帳」, 新校本宮澤賢治全集第13巻（上）覚書・手帳 本文篇, pp.493-580, 筑摩書房
- 村瀬学（1989）『「銀河鉄道の夜」とは何か』大和書房
- 長田恵子（2023）「「銀河鉄道の夜」における二つの主題：万人救済と根源的な母」, 日本女子大学大学院紀要家政学研究科・人間生活学研究科第29号, pp.145-152

- 斎藤純(1994)『「銀河鉄道の夜」物語としての構造—宮沢賢治の聖性と魔性—』
洋々社
- 佐藤泰正(2000)「賢治とキリスト教—「銀河鉄道の夜」再読—」, 国文学 解
釈と鑑賞, 65(2)号, pp.20-26, 至文堂
- 関口安義(2011)「銀河鉄道の夜」を読む(II)」, 都留文科大学研究紀要, 74,
pp.1-21
- 清水正(1992)『宮沢賢治の宇宙—「銀河鉄道の夜」の謎—』鳥影社
- 鈴木健司(2002)『宮沢賢治という現象—読みと受容への試論—』蒼丘書林
- テモテ・カーン(2010)「キリスト教[賢治と]」, 天沢退二郎・金子務・鈴木
貞美『宮澤賢治イーハトヴ学事典』, pp.130-133, 弘文堂
- 上田哲(1988)『宮沢賢治—その理想世界への道程—改訂版』明治書院
- 山根道公(2023)『遠藤周作「深い河」を読む—マザー・テレサ、宮沢賢治と
響き合う世界—(遠藤周作探究II)』日本キリスト教団出版局

参考文献

- 天沢退二郎・金子務・鈴木貞美(2010)『宮澤賢治イーハトヴ学事典』弘文堂
- 土居健郎(2001)『甘え・病い・信仰』創文社